

ジュンドウ村の或る家には多くの動物が生活していて、「耳」が彼らの王様だった。「蚊」は村から少し離れたところで生活していた。或る日、「耳」は「手」に会いに出かけて、うちの動物たちの世話をする者を探していると言い、「手」はその仕事を引き受けた。「手」は飼育係になった。或る日、スングーラ（ウサギ）が「手」のところにやって来てこう言った：「私にはわからないんだ。君が金持ちの牛や子山羊の飼育をやっているのに、君は貧乏で、寝るための家もなくて樽の中で寝ている始末だ。誰か動物たちを見張る者を見つけるべきだ。そいつは村から離れて住んでいなければならない。私は「蚊」ならそれが出来ると思う。動物たちは水のそばで生活しているからね」。「手」は「蚊」に会いに出かけ、「耳」の家畜の飼育を一緒にやらないかと提案した。但し、「耳」は自分しか信用していないので「耳」に知られないようにしなければならないと言い、「蚊」は仕事を引き受けた。

スングーラは或る日「手」のところに戻って来て言った：「君はこれから家を建てることを考えなければいけない」。スングーラは「手」に、「耳」に疑われないように誰か他の者を介して仔牛や牛肉を売ることを提案した。「手」はこの商いを続けてとうとう家を建てた。

王様（「耳」）が来る度に「手」はこう言った：「仔牛が今 22 頭いますが、25 頭入り用です」。スングーラがまた「手」のところにやって来て言った：「結婚するのに金がいるのだけど持ち合わせがないんだ。ついては、牛一頭、子山羊一匹、ウサギ一羽を連れて来てくれるとそれらの動物で用が足りる」。「蚊」が「手」に会いに来て言った：「あいつ[スングーラ]を助けてやってくれよ。村に残っている最後の古株なんだから」。「手」は受け入れて、スングーラは豪華な結婚式を行い、村の長になった。

或る日「手」は「蚊」に、取引分を減らすことを告げた。2リットルの牛乳なら1リットルという具合に。「蚊」はそれを拒んで、そのような変更の訳を尋ねた：「自分はスングーラの結婚のために多くのものを与え、馬車しか持っていないのに。解決方法を見つけることだ。すべて首尾よくいかなければ全部のことを「耳」にばらすぞ」。

「耳」は自分の家畜の多さを自慢していたが彼は中風で動けなかった。「手」が自分に報告することで満足していた。「蚊」は「手」に対して執拗に頼み込んだが「手」は断った。「蚊」は「耳」のところに苦情を伝えに行こうとしたが「手」が邪魔をした。

いつもこういう具合になった。「蚊」が「耳」に近づいて何かを言おうとしたら、「手」が割って入って「蚊」に言うのだった：「あっちへ行け。何も言うな。我々は二人とも横領したのだ」。

「蚊」は家に戻るとスングーラのところに助言を求めに行き、スングーラは言った：「見つからないように「耳」のところに行って、3日そこにいたら水の中に隠れるのだ。「耳」は時々殺虫剤を撒くから、その時は話はできないが、それが解決方法だ」。

「蚊」はそれを実行し、3日の間隠れた。彼は「耳」の血を吸い、それから隠れるために戻った。そうこうするうちに「手」がスングーラのところに行って、「蚊」はもう信用出来ないと打ち明け、見張っていないと自分たちの闇取引のことをすべて「耳」に話してしまうだろうと告げた。

「蚊」は相変わらず[「耳」に]話すことが出来なかったが、或る噂が村中に広まった。「耳」の牛の数が著しく減ったことが話題に上り、スングーラが突然豊かになったことに皆驚いた。「耳」の妻は、スングーラが「手」を操って金持ちになったのだと知らされた。

スングーラは「蚊」にこう言った：「事態がどうであれ、今日にも君は命を落とすだろう。「耳」の妻が殺虫剤を撒くだろうから本当に急がないといけない」。「蚊」はすべてを明らかにする決意で、「耳」が身を落ち着けるとすぐにその傍らに行った。しか

し、そうこうしているうちにスングーラが「手」に「蚊」の目論見を知らせ、「手」は素早く間に入って「蚊」が何も暴露しないようにした。そうしないと彼らはすべてを失うことになるからである。これが、王である「耳」のところに「蚊」が行こうとする度に、「手」がそうはさせまいと干渉する理由なのである。